

<資料>

2019年度「つなぐパネル」講演録

石本雄真・片山敬子

はじめに

今年度は、「つなぐパネル」(パネル・ディスカッション)として、「特別支援教育」と「教育相談」をテーマとして2回実施しそれぞれ2名のパネラーに登壇いただいた。以下では、「つなぐパネル」(パネル・ディスカッション)の様子を逐語録として紹介する。

なお、個人情報に関する内容については削除・改変を行っている。また、講演は写真や動画を含めたパワーポイント資料をプロジェクターで投影して行われており、写真やスライドを指示しながらの場面が含まれるが、文中には特にその箇所を明示していない。

テーマ1 「特別支援教育」

(片山) 始めさせていただきます。まず、今日おいいただきました講師の先生お二人をご紹介しますと思います。お二方の先生においでいただきました。まずこちらから、県立倉吉養護学校からおいいただきました、大木公子先生です。特別支援のコーディネーターをなさっていらっしゃいますので、特別支援学校でのご経験を通して、いろいろ、皆さんにとって多くのサジェスションがいただけるものと思っています。皆さんのほうから何かご質問したいことがあったら、遠慮なく質問していただけたらなと思いますし、そういうチャンスも作っていただいているようですので、楽しみにしてください。もう一方は、鳥取市立修立小学校からおいいただきました、大川祐子先生です。大川先生は、長年に渡られて、LD等専門員という立場で、いろんな学校に出向かれて指導をしてくださっています。子どもたちの様子を少しの時間で鋭く見極めていただいて、的確な指導やアドバイスをくださって、学校現場では大変お世話になっているところです。今、特別支援教育は特別支援学校のみならず、いろんな校種において求められている教育の一つだと思っています。そういう部分で、皆さんがどういう立場にこれから将来なっても、いろんなヒントやご経験が皆さんにとって学べるものだと思いますので、皆さんしっかりと聞いていただいて、先生のほうにも何人か、聞いてみたいことがありましたら、遠慮なく質問をしていただきたいという風に思います。それではまず、大木先生のほうから、始めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

(1) パネリスト講演:

大木公子 鳥取県立倉吉養護学校

(大木) 今、ご紹介をいただきました。私は、倉吉養護学校、ご存じですか。倉吉養護学校知っているよという方、手を挙

げていただいていいですか。はい、ありがとうございます。倉吉はご存じですか。倉吉市は知っています?はい、ありがとうございます。その倉吉市からやってきました、大木公子といえます。よろしく願います。

私はここに書いてありますように、倉吉養護学校の支援部というところにいます。特別支援教育コーディネーターという仕事をしています。このコーディネーターという仕事なのですが、実は、学校に勤めてはいますが、倉吉養護学校の小学部・中学部・高等部の子どもたちに授業を教えているわけではなくて、支援部というところで、学校の窓口、本校に就学・進学を考えている方の受け入れだったりとか相談だったりとかということをしています。地域支援活動というのを主にやっているのですが、お手元の資料に、倉吉養護学校の地域支援活動というチラシみたいなものが入っていると思います。ありますでしょうか。そちらのほうに地域支援活動のご案内というものがあります。ここに書いてある内容の仕事をしているという風に考えていただけたらと思います。では、今日は、その地域支援活動の話をしていきたいと思います。

特別支援学校と言っても、倉吉養護学校は知的障害と肢体不自由の特別支援学校です。県内に、このあと出てきますけれども、特別支援学校は沢山ありますが、まず、鳥取県立米子養護学校はご存じでしょうか。知的障害の子どもたちの特別支援学校です。西部には、このように聾学校の分校、それから皆生養護学校、肢体不自由と病弱の特別支援学校です。それから、琴の浦高等特別支援学校ご存じですか。知的障害のある高等部のみの特別支援学校になります。それから、倉吉養護学校出てきました。それから、白兔養護学校はご存じですね、知的障害の特別支援学校です。それから、鳥取大学の附属特別支援学校も知的障害の特別支援学校です。鳥取には、鳥取養護学校、肢体不自由と病弱の特別支援学校、それから盲学校と聾学校もあります。県内にはこのよ

うに特別支援学校、さまざまな障害種の特別支援学校があるのですが、この特別支援学校の役割について今日はお話したいと思います。

その前に、小学校・中学校、今特別支援学級ってありますよね。その特別支援学級も、知的障害の特別支援学級、肢体不自由の特別支援学級、それから、難聴だったり弱視だったり、病弱だったり、それから自閉情緒の特別支援学級もあります。この、特別支援学級から本校に来られる場合は、知的障害、それから肢体不自由の特別支援学級から本校への転学とか入学ということになっています。皆さんご存じだと思いますが、小学校、中学校、高等学校、それぞれ子どもたちの教育の大本は学習指導要領というものがあります。その学習指導要領に、個々に明記してあることなのですが、地域における特別支援教育のセンターとしての役割を務めること、これが特別支援学校に求められている役割であります。これを受けて、倉吉養護学校では、倉吉養護学校中部にありますので、鳥取県の中部圏域の地域の特別支援教育に関わるいろんなセンター的機能を果たしているというところなんです。先ほど、鳥取県の地図が出てきましたけれども、各特別支援学校、西部だと米子養護学校、東部だと白兔、付属が知的障害におけるいろんな教育相談をされているというところなんです。倉吉養護学校ははじめにも言いましたが、知的障害と肢体不自由のお子さんに関わる特別支援教育の専門性を活かした地域支援を行っているというところなんです。一番下に括弧で発達障害教育拠点校と書いてあります。これについてはまたあとでお話したいと思います。

他機関との繋がりとということなんです。これは中部の例ですがどこも変わりはないと思います。倉吉養護学校、先ほど言いましたけれども、小学校の通常学級、それから特別支援学級、中学校の通常学級、特別支援学級におられる障害のあるお子さんの相談に乗っています。小中だけではなく、高等学校にも出かけています。就学前、保育園、子ども園、幼稚園に在籍しておられる障害のあるお子さん、困難さがあるお子さんについての相談も通っています。そのときには必ずやはり、市町の福祉課、子ども家庭課とか、就学前のお子さんですと、保健師さんとか関わることもあります。小中学校においては、市町の教育委員会の方と一緒に相談活動をすることもあります。高校生の場合には、あとの繋がっていく先、福祉施設だったり企業だったりということも関わることあります。もちろん医療との連携もしているというところが、地域支援活動において他機関との繋がりでとても大事な役割になってきます。

ここからは、先ほど最初に見てくださいとお伝えしたチラシの内容を少し説明していきたいと思います。倉吉養護学校、特別支援学校で学ぶことが、そのお子さんの持つおられる能力とか資質を伸ばすということは何もない状態では分かりません。どこで学ぶのが、どんな風な見方がこのお子さんに適しているのかなということを見極めるために本校では体験学習というものをやっています。保育園、こども園、幼稚園、それから小学校、中学校のお子さんが本校にやってくる、実際に登校から下校まで一日本校の教育の内容

と一緒にしていただくという体験学習をしています。体験することで、こういう学び方をするとできるんだとか、分かるんだとか、安心できるんだということを実際に体験する、これとても大事です。なので、そのお子さんにあつた学びの場の検討のための情報提供ということで体験学習もやっています。それから、本校に来られるということではないのだけれども、そのお子さんに合った支援について学びたいよということで保護者さんやそれから、学校の先生方が来られて体験をされるということもあります。下の方には体験入学ということも書いてあります。これは体験学習とちょっと意味が違います。本校には高等部もあります。高等部は義務教育ではありませんね。その高等部の受験をするために、体験入学というのを、中学3年生の、本校を進学先に考えておられる生徒さんにはいただいています。これは必ず受けていただかないと本校を受験できませんよという受験の条件にもなっているということもお伝えしておきたいと思います。体験を一応9月までにしてくださいねとは言っているのですが、いろんなご事情があつてそれ以降でもとりあえず体験をしてから、本校を受験してくださいという決まりになっていることを知っておいてください。

はい、教育相談活動です。これがとても多いです。チラシのほうにも書いています。障害のあるお子さんの生活や学習での支援、就学支援など、さまざまな相談に応じますという風に書いています。どこからどんな相談が来るのかなとちょっと時間がないので詳しいことは言いませんけれども、先ほど言っているように保育園だったり小学校中学校だったり、それから保護者さんからも沢山きます。学校だけではなくて、家でもこんな風に困っていますということで、保護者さんから直接お手紙をいただくこともありますし、さっきいろんな機関と繋がっていると話をしました。そのいろんな機関を通して、保護者さんの困り感があつてね、ということで繋がってくるというお話もあります。年間延べだと1000件以上になると思いますが、それくらいの件数で相談がかかってきます。どんな相談があるかなというのには下に書いてある通りです。特に多いのが、小中学校の特別支援学級の先生方から、どんな風な指導をしたらいいの、この子の実態どんなの、というあたりを聞いて来られる方も沢山います。最近は自閉情緒の学級、知的障害はないのだけれども、自閉情緒の学級の先生方、対応に困っているという相談も増えています。相談の内容、ちょっと書いていたね。具体的にはと書いています。

本校は知的障害の特別支援学校ですので、小学校中学校の教育課程とはちょっと違います。教育課程のことはもうご存じですかね。特別支援学校の各教科って一番向こうにあります。これは小学校や中学校の各教科の、さっき冒頭に言いました学習指導要領ですね、それが違うので、小学校中学校の各教科の目当てではない。例えば、小学校の1年生2年生、生活科ってあるのですが、本校にも生活っていう学習はありますが、それは違うものです。学ぶ内容、似通ったところもあるのだけれども、そもそも目標が違います。そういう教育課程が違うところをちょっと知っていた

きたいのと、本校特別支援学校には来ておられないのだけれども、地域の小学校の支援学級、知的障害の支援学級の中で、特別支援学校の教育課程をとっておられる方もあります。これもまたちょっと別の学びになるのですが、就学のときに保護者さんが地域のほうで学んでいきたいのだということをおっしゃって育てられる方もあります。そういう風に、小学校の教育課程ではない教育課程を、そのお子さんに合った教育課程を保証されているわけなので、そこでの相談という形でかかってくる。それが各教科の指導というあたりで、特別支援学校の教育課程の各教科ってどんなことをするのということと相談が来ることもあります。それから、日常生活の指導、生活単元学習、作業学習、ご存じですか。聞いたことあるよという方ありますか。はいありがとうございます。これは、知的障害の特別支援学校の教育課程にあるものです。各教科と領域を合わせた学習になります。これも小学校や中学校には教育課程が違うのでないの、このあたりのスキルもお伝えするということになります。それから、一番下にあるのが自立活動ですね。これはどこの支援学級にもあると思います。学習指導要領にも自立活動で一冊出ていると思います。その内容を各特別支援学級やそれから通級指導教室というのが各学校にあります。それで行われている学習になります。こういった内容の学習を実際どのようにするのだという相談がとて多いです。

発達障害教育拠点と最初のほうに出ていましたけれど、すみません、多分後回しにしたので資料が前のほうにあるかなと思うのですが、知的障害の特別支援学校は本校だけでなく県果だったり、白兔だったり附属だったりものですが、知的障害だけでなく発達障害の教育の拠点校ですよということが言われています。というのは、これが平成18年度から本校が一番最初のスタートだったと思うのですが、特に自閉症を中心とした発達障害教育の充実を図りたいということで自閉症の方で知的障害がある方もいるのだけれども、今はあまり言わないですが高機能というか、知的障害のない方もいらっしゃいます。なので知的障害ではない学級、自閉情緒の学級のお子さんに関する指導や教材だったり、そういうことも相談に乗ってくださいねということがスタートしています。自閉症だけではなく、ADHDだったりとかそれからLDだったりとかいろんな発達障害があるのですけれども、そういうことで今本校では、子どもたちの多くが知的障害と自閉症を併せ持っている子どもたちでありますので、そのあたりのスキルを活かして相談活動を行っているということになります。

一番下のほうに、通級指導教室レインボー開設という風にしてあります。それから、LD等専門員と書いてあります。本校では、このチラシの方にもありますが通級指導教室レインボーという教室があります。通級といたら小学校とか中学校の中にある通級を思い浮かべられるかもしれませんが、特別支援学校で平成18年度から一番初めて本校が通級指導教室始まったということで、この活動も、ほかの特別支援学校とは動きがちちょっと違うことになると思います。この上にあります自閉症の方の支援を沢山して

きているということでその辺のスキルが沢山ある通級になっています。それから、このあとお話される大川先生、LD等専門員の先生でいらっしゃいますが、大川先生は小学校に在籍されていますが、本校にもLD等専門員が在籍しています。特別支援学校に在籍しているのは多分本校だけかなとは思いますが。本校のLD等専門員の先生は倉吉市の小学校中学校の通常の学級の子どもの相談に乗っておられます。先ほど言いました、自閉症だったり、いろんな発達障害あるのですけれども、知的障害のない通常学級におられる方の相談に乗っておられます。なので、支援部の中におられるので通常の子どもの支援の相談で、私たちは支援学級、特別支援学級の相談に乗っているわけですが、ただ、通常におられても支援学級に入られたりとか、支援学級から通常に戻られたりとかというお子さんもいらっしゃいますので、そのあたり連携しながら進めているというところなんです。

ここから、ざっとご紹介だけしていきます。研修会を行っています、年に5〜6回なのでしょか、地域支援活動のひとつとしてLD等専門員の先生にお世話になって、読み書きに躓きのある子への支援や算数が苦手な子への支援というような研修会を行っています。それから、肢体不自由の特別支援学校でもありますので、皆生養護教諭それから鳥取養護学校と肢体不自由の特別支援学校の先生方と協力して、肢体不自由に関する研修会を行っています。肢体不自由学級の担任の先生が県内から来てくださっています。これは、感情と社会性の育ちに躓きのある子への支援ということで、レインボー、先ほどご紹介しました通級指導教室レインボーは社会性、対人関係にちょっと困り感がある通常の学級の小学校1年生から中学校3年生までの子どもたちが本校に来て、学んで帰られます。だから、一応小学校や中学校の学習を5時間目ぐらいまでして、6時間目の時間を自立活動という学習に代えて本校に来て、低学年は60分、低学年以上、3年生以上は90分で1つのコマで一週間に一回、来て学んで帰っています。だいたい通級といたら1対1で勉強するところが多いのですか3〜4人の子どもたちが一堂に会して、まず個別の学習をした後に、3人でグループで、対人関係に困難さがある子どもさんも多いので、グループで学んだことを活かすようなゲームをしたりとか、話をしたりとかっていうような学習形態をとっています。そのレインボーでのいろんな実践があります。子どもたち実際に来て変わっていきます。その実践をこうやって地域の先生方に、実践を通して学んだことを私たちが伝えているというような研修会もしています。これですね、これが通級指導教室レインボーの様子です。自立活動なので、自立活動に関する相談もこのところに沢山来るといような現状になっています。一番大事なのは、在籍校の先生方、通常学級の子どものためです、その担任の先生方、それからその学校の先生方に、この子を通して発達障害のあるお子さん、この子だけではなくて、みんなに有効な支援はこんなものですよというのをしっかり伝えるという役割がレインボーにはあります。ここから、そうか、そういう見方をしてるんだ、この子はこういうところに困っていたのだとい

うところをお伝えして、学校の中でそれを活かしていただくということで、すごくレインボーの役割は本校としては大きいかな、地域支援活動の軸にもなっているのではないかなという風に思っています。すみません、時間がなくて早口で、おしゃべりしてしまいましたけれども、とても沢山の内容でしたし、分からない言葉も沢山あったと思います。またあとで資料を読み返していただいて、調べていただいたり、分からなかったら質問をしていただけたらと思います。では、私の話はこれで終わりたいと思います。

(2) パネリスト講演：

大川祐子 鳥取市立修立小学校

(大川) 失礼します。LD 等専門員の大川と申します。だんだん外も暗くなってきて、気持ちもちょっと暗くなるかもしれないのですが、お話ししたいと思いますのでよろしく願います。先ほど大木先生のほうから特別支援学校のセンター機能についてというお話をさせていただいたのですが、私のほうからは、通常学級でどのような支援をしているかということをお話ししたいと思います。何故かという、特別支援教育その前は特殊教育と言っていて、それぞれの障害の程度とかニーズによって、特別な場所で支援をしていくという教育でした。それが特別支援教育といって、児童生徒 1 人 1 人の教育的ニーズ、困り感に対してしっかり支援をしていくということに変わってきました。通常学級にも沢山支援が必要な子どもさんがいます。その子どもさんをどう支援していくかということでできたのが、LD 等専門員という仕事です。実は私も 8 年前に鳥取大学で専門員研修を受けてそこから専門員になった次第でございます。本当はここでこんなことを言うてはいけないのですが、専門員になるつもりで研修を受けたのでなくとても厳しい LD の子がいて、その子がなんとか文字の読み書きができないかなというのを勉強しに来たつもりだったのです。

LD 等専門員というのはどういう仕事をしているかという、専門員は鳥取県独自のシステムでして、通常学級で支援が必要な子どもさんたちに対していろいろ巡回をして相談に乗るという仕事をしています。現在は東部で 6 名、中部で 3 名、西部で 5 名の計 14 名で県をずっと回っています。私は専門員として 7 年目になるのですが、今、小中義務教育学校併せて 18 校の学校を回っているところです。やっている仕事という先ほどの大木先生の話にも重複するところがあるのですが、基本は通常学級をみるということで年に二回の巡回相談を行っています。これは個別の指導計画のある児童生徒の相談活動をまず基本に行っています。継続的にきちんと支援がなされているかというところを見ていく必要があるんで、必ず個別の指導計画がある子どもさんを見るようになってきました。そのときにその子どもさんたちの学校体制が上手くいっているか、環境が上手くなっているかということも話をして助言します。個別の指導計画がなくても困り感があって指導がなんか上手くいかないなと思ったら連絡をいただいて相談に乗る依頼相談を行って

います。そのためにアセスメントをしてどういう支援がいいかをみていますので、各種検査も行っています。そして最近とても増えてきたのが保護者相談です。その他、支援会議とかにも参加しています。もう 1 つは研修も行っています。中学校区で研修を行ったり、出向している学校の研修に参加させていただいて特別支援教育についてとか発達障害について話していますが、最近は例えばアンガーマネジメントだけをお願いしますとか、ユニバーサルデザインの授業づくりについてをお願いしますとか、発達障害の話が殆どだったのに二次障害についてとか、結構そういうポイント、ポイントでお話をいただくことが増えてきています。事例検討会とかにも参加しています。このように、研修と保護者さんと先生等に会ってすごく感じるこなのですが、初めの頃は発達障害って何？という話を主にしていたのですね。ところが、最近は随分変わってきています。

どう変わってきたかという、どちらかという保護者相談がすごく増えています。やっぱり学校と保護者さん共に、困っているのは子どもなのだから子どもが上手くいくようになんとかしていきたいというのは本当に同じ目標なんですけども、中には、保護者さんと学校とが対立してしまうことあるのです。そういう中で、やっぱり誰か仲を取り持つとか、上手くそこを調整するというものはすごく必要だと思います。子どもの中には、学校の顔と家の顔と全く違う子どもさんもいます。学校はすごくいい顔をしているのに、家では暴れているという場合は、お母さんたちはすごく困るのですね。つらいのですが、学校に大丈夫ですと言われると、もうそれで何も言えなくなるという場合もあります。逆に、学校はすごく大変なのに、家ではチーンといい子をしているという場合、先生が一生懸命生きていてもそれをなかなか保護者に受け止めてもらえないという場合もあるのです。そういう中で、二者で話をするとうまくいかないときにどこか専門機関とか外部の者が一緒に入ること、緩和されたり、方向性がはっきりしたりします。そこにしっかりとお手伝いできたらなと思って今やっているところです。私の仕事の話はこれで終わりです。

ですが、ちょっとだけ発達について話をしたいと思えます。皆さん、発達ってどういうことかということを考えたことがありますか。生まれ持ったものがそのまま大きくなるのか、と考えたときに、実は、生まれ持ったものだけで大きくなるわけではないのです。ということは、例えば発達のちょっと困難さがあっても、上手く社会生活を送っている人はかなりあります。それは何かというと、やっぱり環境や経験、そういうものとの相互作用で人は成長することをお頭においてもらいたいなと思います。何故かという、生まれ持ったものでは本当にうまくいきそうなのに実際には環境でうまくいかないという子どもさんもいます。養育が難しい保護者さんもいらっしゃいます。環境のためうまく学べなかったり脳が委縮しちゃったりする子も実際にあります。ただ、養護施設等で温かく温かく愛情をかけてもらって、落ち着いていくお子さんの姿を見ると、持って生まれた個性や特性だけでなく、やっぱり私たちは人との

関わりというのをすごく大事にしていかななくてはかかないと思います。やっぱり教育や保育ってすごく大事なので、皆さん、教員目指していただいているということでもすごく嬉しいです。その中で、是非いい出会いになってもらいたいなと思います。

実は昨日テレビを見ていまして、「先生に会いたい」というテレビでした。そのテレビがどういうテレビだったかという、ある俳優さんのお話で、自分はずっと学校が嫌いで仕方がなかったと。何故かという、集団行動が上手く取れなくて、みんなができることができなくて、いつも先生に何であなただけできないのと言われて続けた。そんなすごいつらいときに、4年生のときの美術というか図工の先生が、初めて絵を褒めてくれたと。周りの子はこんな変な絵、と笑っていたのだが、この人には個性があってこんないいところがあるよって初めていわれて、そこから自分は自分の持っているものを大事にしなくちゃと思って、個性を磨ける仕事をしたいということで俳優という仕事をしているということを知りました。私たちはやっぱり発達を考える中で、持って生まれたもの、個性や特性をなんとかしなくちゃと思うだけではなくて、いい環境の中でしっかりと育てていきたいなと思います。ただ、できる人ができないことを考えるとなかなか難しく「なんでできん」と思うのです。ということでちょっと時間があるのでその体験をせっかくですでもらおうと思っています。

中学校なんかで、暴れていたり不登校になっていたりする子の中には実際には読み書きのできない子どもが沢山います。今回は読み書きの苦手さを体験してもらおうと思います。読みというのは音韻と言って形に対して音を当てはめるということです。それが上手く操作できる子はさっさと読めるのですが、そこが、どれだったっけ、と思う子はなかなか読めません。今日はそれをちょっと体験してもらおうと思います。いいですか。これから算数の問題を出します。やったことはあるかもしれない、また？と思うかもしれませんがちょっとやってみてください。いいですか。「か」という音と「や」という音が逆になります。「ん」と「れ」は、「ん」と書いてある文字を見たら「れ」と読まなくてはいけません。いいですか。「い」というのは「こ」です。「つ」というのは「わ」です。いいですか。子どもたちはそういう操作を頭の中でしっかりやって音声を出しています。覚えましたが。いきますよ。問題出します。皆さん一緒に読んでもらいたいと思います。

(全員)「80円の飴と120円の煎餅を3個ずつ買いました。1000円出すと、おつりはいくらになりますか。」

(大川) 揃いませんでしたね。皆さん、きっちり揃えて読んでほしかったですね、なんて子どもたちが読むときに言うんですね。さていくらでしょう。って、すぐ計算できませんよね。これじゃあ読みます。80円の飴と120円の煎餅を3個ずつ、なんだっけ、忘れまして。1000円出すといくらになりますかということなので、これは、答えは400

円ですね。ところがぱっと出ないのですね。私もそう、途中ちょっと上がってしまったら文字を読めなかったのですが、当たり前を読めると思っているものを読めなかったら、本当は計算する力も考える力もあっても読めないことで計算ができないことがあるのですね。こういう子どもが実は沢山います。ですので、そういうところは是非分かってもらって、「なんで読めんだ。」とか「なんでできんだ。」って言わないようにしてほしいなということを出してみました。

次は書きの練習です。ちょうど紙の白の空いているところがあると思うので、書いてもらおうと思います。今日は、おはようという字を書いてもらおうと思いますのでお願いします。いきますよ。はい。じゃあ、よーいスタート。まあ、おはようぐらいだったら5秒で書けますよね。って、ここで本当にべらべら喋ると気が散ると思うかもしれませんが教員はよくしています。実はこれアラビア語です。私たちは漢字とかは結構文字として認識するのですが、アラビア語って文字で認識できないので、これをどうして書いていいかわからないのですね。こちらから見ると皆さんが何度も何度も顔を上げたり下げたりしている姿を見ます。実はそういうことで、形を捉えにくいということは、何度も何度も見なくちゃ正しく書けないのですね。ということで相談で子どもさんが漢字を書けない、何か突き出ているのとか2本のところが3本になるのと言われますが、漢字が書けない子どもは、実際には形を上手く捉えられなかったり覚えられなかったりということが起こってきています。ちなみにですけども、アラビア語は右から書きますので、こっちからスタートです。で、こうきてこうくるのですね。頑張っって勉強しました。ちょっと見てもらいたいのですが、実はこの上の言葉というのは、良いことの朝というのが翻訳だそうです。下は光の朝という字だそうです。そこで見てもらったら、今まで別々と思っていたかもしれませんが同じ文字が付いているということがわかりますか。これ、ここが同じですね。でも、こういう説明がないと全部別物と思って書いてしまうようになるのです。漢字なんかは意味が分かるし理解しやすいということもちょっと分かっていたかと思っただけで体験をさせていただきました。ということで、困っているものというのは特性的なもの、環境的なもの、それぞれあります。でも私たちが気をつけなきゃいけないのは子どもたちが「どうせできんだろう」と気持ちを落とすしてしまうということです。二次障害といって、本来持っている苦手さに加えて、不適切な関わりによって失敗が続くと更なるマイナスな行動が引き起こされてしまうということです。実は、小学校入学前から二次障害を起こして入ってくるということも実際あります。中学校の多くの子どもさんの中に上手くいかなくなって二次障害を起こしてどうしようもなくなっておられるなということも実際はあります。ということで、表出している言動ばかりに目を向けると、そこに隠れている本人の苦手さや困り感が見つけにくいので、本人の行動の背景を探ることが大事になってきます。一旦ここで体験を演習してもらおうと思うので交代しよ

うと思います。すみません、ぺらぺらと早口で失礼致しました。

(3) 演習

(大木) すみません、再び失礼します。私のほうからは、今大川先生のほうから話をさせていただいた、本人の行動の背景を探るところで。さっき大川先生のほうから困り感、体感していただいたように、困っているのは子どもで何に困っているのかなという、今日は文字の見方だったりですが、その困っていることについて探っていこうという時間にさせていただきます。

氷山の写真です。冰山モデルって聞いたことがあります。冰山モデルというのを使って、今日は子どもたちの困った背景をよく考えていきたいと思います。さまざまな現象には理由がありますよね。その根拠となるものやことがあると思います。道が濡れていたら、雨が降ったのかなとか水がかかった、誰かまいたのかなとか、何か現象には必ず理由がある。人の行動についても同じだと思います。私自身も最近よく何もないところで躓きます。それは理由は何だろうかなと、さっき上がってくるところでも躓きかけたのですが、それにも理由がある。まず段差が、障害物があるのだけれども、その次に足が衰えている。筋力の低下もあるし、それから見え方、よく見ていない、注意、それから、衝動性が高くてぱっと何も状況を見ずに動いちゃうとか、そういうやっぱり現象にはいろんな理由があるということで、子どもたちの実態を把握するということでも、必ず、見えている現象と見えない理由があるという考え方をよく、冰山モデルと言います。冰山って見えているところはちよつとなのですが、実は水面下は大きいですよなとも。その、理由をしっかり探っていきたいねということ例えています。

今日は、例えば、ここではさっきはつまずきのことを言ったのですが、ここでは問題行動として見えている、良く友達とトラブルを起こす子どもって学級には何人かいますが、これはその子がトラブルを起こしてしまっていて、悪い子、先生から見るとこの子は困った子という風に見えるのですが、実はそうではなくて、友達とのトラブルを起こしてしまうのは子ども自身が困っているのですよという見方を皆さんにはしていただきたいというところです。この、困った子の、見えないところを考えていくと、原因を探ることで適切な支援や対応ができますよという考え方です。例えば、友達とのトラブルはなんでだろうと考えたときに、状況の読み取りができないのではないかと、ということが考えられます。それには、ひよつとすると見え方の問題もあるかもしれない、聞こえ方の問題もあるかもしれない、経験不足もあるかもしれない。その状況をぱっと認知する、理解するのに、なんか抱えている子ども自身の問題があるかもしれない。それは子どものせいではなくて、そこをどういう風に支援したり教育したりしていったらいいのかというのが、大人である私たちの役割ではないかと思うのです。状況の読み取りができていないのかもしれないとか、こういうのもあ

ります、自分の気持ちを言葉に表すことができない。言葉でやめると言えないからバンッと手が出ちゃうとかね。ということは、やめると言えればいいんだよということを教えてあげる必要がある。その前にそもそも自分の気持ちを理解できていない。感情が分からない。これが嫌な気持ちとかこれが悲しい気持ちとかというのは、その状況と言葉が一致しない子どもたちもいます。そこをしっかり学んでいってもらうということも支援の一つである。だからしっかり原因を探って実態把握、それに見合った支援、教育、指導をしていくというのが必要ですよということです。冰山モデルの考え方、理解できますかね。また実際に、これからやってみようと思います。何が正解でこれではなくてはいけないということは全くないので、今日は皆さんと一緒に考えていけたらと思います。

考えてみましょうというプリントがあると思います。それを出してみてください。今日は、お題を宿題、漢字ノートとしました。漢字の宿題ってよく出ますよね、小学校。この宿題の漢字ノートが、提出できない、いつもやってこない。漢字ノートやってきなさいよ、1ページ書いてきなさいよって言っても出せない子どもがいるとします。こういうお子さん、詳しい実態とかはここでは言いませんが、あらゆることを想定してこの漢字ノートはなぜこのお子さんは出せないのかなということを原因、背景となる部分を考えていただきたいと思います。枠が1. 2. 3. 4. 5. 5つあります。全部埋めてもいいですし、1個2個でもいいですし、そこを考えてもらって、それに対する支援は何をしりたいのかなというのを右のほうの大きなところに書いてもらえますでしょうか。3分間ほど1人で書いていただいて、そのあと、隣の方、同じテーブルに座っておられる方同士でいいですので、シェアしていただきたいと思います。まず3分考えてみてください。頭を柔らかくして、とんでもない発想でも構いませんので、埋めてみてください。隣におられなかったら前後の方で、どんなことを考えた？というのをシェアしていただきたいと思います。5分ぐらい時間をとりたいと思います。そのあと、全員でシェアしていきたいと思いますので、これとこれを話そうね、というような話をしていただけたらと思います。グループになりましたか。よろしいですか。お話をしながら急にマイクを振るかもしれませんが、よろしいですか。では、どうぞ。

沢山書いてくださって、お話も盛り上がっているのですが、時間がないので、これから、大川先生のほうで適当に声をかけていただきますので、今お話された原因と背景だけだったらそれだけでも構いませんが、原因と背景があつてこんな支援を考えていますというところまでお話ししてください。ありがとうございますので、お願いします。

(学生1) 原因と背景しか考えられてはいないんですけど、字の形を上手く捉えることができないということと、言われたこと、先生から注意されたことをすぐ忘れてしまうから記憶ができなくて宿題が出されているということも忘れてしまうとか、あと、そもそも宿題をする意味がないと本人

は思ってしまったとか、手を上手く動かすことができない、周囲の物音とかに過敏に反応してしまって宿題分の集中力が続かないとか、が出ました。

ありがとうございます。拍手をお願いします。では次は男性に行ってみましょうかね。

(学生2) はい、原因と背景について思いついたのが、先ほどのグループと被るのですが、やる必要がないと思っていることであったり、宿題よりもやりたいこと、ゲームやスマホ、そういうことが考えられるのかなと思いました。それに対する支援としては、宿題がやりたくなるような仕掛けであったり、生徒児童にとって楽しくなるようなことであったり、メリットであったり、そういう宿題の出し方を考えてみるのだと思います。以上です。

では、もう一組。言いたい人はないですか。では近くの人でごめんなさい。こちらのグループをお願いします。

(学生3) 漢字を書くことに苦手意識があるのが原因だと考えて、そのために、枠を作らないとか、なぞるプリントにするとか、書く回数を減らすということを考えました。

はい、ありがとうございます。もっと本当に沢山全部埋めていただいている方もありましたし、お話も弾んでいたのので、沢山原因と背景のところを考えていただきました。支援についても沢山考えておられて、もっとあんまり出てこないかなと思っていたのですが素晴らしいと思います。すぐに学校現場で活躍していただけるのかなと思います。やっぱりこの子はどこで困って居るのかなというところをしっかりと探るということ、とても大事です。やっぱりそもそも宿題をする意味がわかっていないのではないかとおっしゃったのですが、多いです。本当に多いです。なんで宿題していかなくやいけないの。復習するとか、毎日積み上げするということは大事だによって先生方は学校で言っているのだけど、そのことが通じなくて、そもそもどんなメリットが自分にあるのかというのが落ちていないお子さんがいるので、いろんな見方をしていただけたらと思います。例えばこんなこと考えられますよというのを、このあと配っていただけると思いますので、見てみてください。ここでは挙げてみますね。何が宿題が忘れてしまう。そういうときには必ず見るものに宿題のことを書いておくとかね。漢字の量が多いと書いておられた方もいましたね。書くということ自体に困難さがある。何回も書いて覚えるのが得意な子もいるけど、一回書くだけで十分という子もいるので、書く量の調節をしてあげるといいます。それから、どの字を書くのかというのが分からないという場合は、付箋をつけてこれ書いておいて、というのをしておいてあげる。書くことに苦手があるといって、その子の分かりやすい枠を作ってプリントにするとか。やっぱり分かるようにならないから取り組む気持ちにならないというね、そういう場合も楽しくでき

るようにするって書いてくださいました。今日は、解答例でするので実際には他にもいろいろあると思います。

ここでは実態把握と支援について考えてもらいましたが、この実態把握というのができたら、一番右に目標というのが書いてあります。こういう実態があるから、こういう目標を立てていきましょう、ということを考えていくというのがとても大事です。これは、支援学級、支援学校のお子さんだけではなくて、通常におられるお子さん、診断名があるないに関わらずこの子にはどんな力を付けていったらいいのかなということをしっかり読み取ってあげるということ、とても大事になります。これが、個別の教育支援計画、ご存じですかね。障害のあるお子さんが個別の教育支援計画というのを一生持っていくものなのですが、その支援計画とか、個別の指導計画というものがあります。それを基に私たちは子どもたちに力を付けていくという大事な計画があるのですが、それを考えるときにとても大事になってくる実態把握、それから、支援について考える目標ということになりますので、こういうことを知っておいていただくと、小中学校の先生になられたときに、支援学級だからとか障害があるからとかないからとか関係なく、こういう視点を持っていただくということはとても大事かなと思ってこんなワークをしてみました。このあと、まとめの話を大川先生にさせていただきたいと思います。バトンタッチします。

(4) まとめ

(大川) 先ほどの学生さん方の話し合いを聞いていて本当に感心しました。よく考えておられると思いました。私たちも、学校で一生懸命に考えるが、相対して子どもと一生懸命にやればやるほど見えなくなるということもあります。でするので、こんなに頑張っているのに何でと思うことも実際あるんですね。でも、そんなときに見えない要因を見つける必要があって、そのときに必要なのが行動観察とチェックリスト、ここに書いてあるようなものです。実は学校現場では、結構WISCをとってくださいと言われることがあります。WISC 検査というのは、個人内でどこに得手不得手があるかというのが見えやすい検査なのですが、結構支援学級に移動しようかと考える指標になる検査なので取ってほしいという方が結構います。でも、実際に支援を考えるには、それよりもノートを見たりとか、子どもの様子を見たりすると、そこで見えるものって沢山あります。それ以外にも、読み書き検査とか、語彙検査でも知的レベルは分かります。保護者さんとお話するときに、客観的なデータは必要で、なるほどなどと思ってもらうためにも必要ですので、情報収集する中で、ノートを見たりした後で、やっぱりでも難しいところがあるなという場合には専門員とかセンター機能の先生のような方とかに相談していただいて、検査をとっていただくというのも重要な支援につながっていきます。実は学校の中でどう支援したらいいか分からないと言われることがよくあります。例えば、なかなか漢字が書けないだとか計算はなんとかできるのだけど計算の文章題が全然できないとか

いう話が出てきています。そういう困り感に対してみていかななくてはいけないので、一人で悩まずにいろいろな人と、担任同士とか主任の先生とか、学校のみんなで相談し共有しながら支援を行っていくのが大事になってきます。特に発達障害のある子どもさんは認知の苦手さもありますし、不登校を起こしてしまう子どもさんや飛び出しちゃう子どもさんには学習空白というものもあります。どこに困難さがあるかという土台をみていくといいと思います。

簡単なことを言うと、これはすごく一生懸命に頑張らせるより1日5分継続するという方が定着が良いです。山田充先生という読み書きについての本を書いている先生と話したときに、漢字を上手く書くのに、漢字を練習すると嫌になるという話をされました。では何を練習するかというと渦巻きを描けと言われてました。渦巻きを描いて手を回す練習をし細く何重にも渦巻きが描けるようになるという字が書けるよ、マスに入るよと言われて、ある子が半年続けたときに、半年前と6か月後を比べると明らかに違っていました。でもその子は本当に毎日5分だけ頑張ったんです。5分も立ってないのね、1分ほど渦巻き描いて寝ようくらい。そういうコツコツとやるということが一番の大事で、それを励ますというのが大事な支援です。できないことをしようとかさせるばかりが支援ではないと思います。それから、社会面の支援でも先ほどもお話がありました、感情のコントロールも本当に大変な課題になっていますので、そちらもいろいろ考えていく必要があります。詳しいことは話しませんが、是非どうしたいかなと思ったときには本を読んだりまた別の機会に話を聞いたりするといいかなと思います。

支援にあたって気を付けることで、私たちがすごく気にしているのは、一貫した支援をしてほしいということです。実は自分も担任をしていると、子どもの姿を見たときに心がぶれてしまうことがあります。でも、特に発達に問題がある場合に、「え、この前は言ったのに何で今違うのや。」みたいな感じで言う子も実際にいます。一貫した支援をしっかり心がける、良い行動を増やすというのが目的ですので、苦手な行動、減らしたい行動はちょっと待つ、そしてできたときにタイムリーに褒めるとか、でも、どうしてもだめなことは、なんでも褒めればいいのかではなく、だめなときはきちんとだめだよ、こうしたらいいよのような良い行動を伝えることが必要になってきます。叱るときのタブーとか、子どもが感情的になったときに大人が気を付けることとか書いていますので、また見ていただけたらと思います。基本的には、上手くいくためにどうしたらいいかということ伝えるのがいいと思います。

子どもたちの中には発達障害の特性としてできないとい

うよりも、どちらかという自分はどうせできんしという意欲が減退してしまっていてできない子たちが沢山います。私たちは自尊感情を育成しなくてははいけません。そこでキーワードになるのが、周りから認められている、受容されているという安心感、やれたできたという達成感、自分は必要とされている有用感です。これらをどこかで子どもたちに持たせていくと子どもたちは変わってきます。そう考えたときに、通常の学級で何が大事かというと、個の支援の話をしてきていますが、やっぱりクラス作りが大事、温かい雰囲気クラスのクラスが大事になってくると思います。困っている家庭というのは、頑張ってもやらせたくてもできないという場合もありますので、親の支援も念頭に入れてください。困ったとき、大木先生から渡されましたが沢山の専門機関、連携の場が今、沢山あります。そういう情報も上手に入れながらやっていただけたらと思います。今の教育現場は実は本当に大変で、今の若い先生方本当によくされているなと思っています。是非、お仲間になってもらえたらなと思います。

最後です。子どもたちは大切にされると実感し、本人の良さに気付くと変わっていきます。ただ本当に時間がかかります。でも、重要なことはコツコツと継続することです。支援する者は先が見えないと不安になります。だから一人で抱え込むのではなく、本人や保護者さんをチームで支えていくことが大事です。ある中学校の先生がこんなに頑張っている手立っているのに変化が見えないですと言われていました。ルビを振ったり、テストでもこうちょっと大きな字に拡大したりとかいろいろするのに少しも点が伸びないと言われてましたが、その子は1年後にちょっと成績が伸び出したことによって、今まで全く勉強しなかったのが自分でやろうかなという気持ちになってきたというのが実際あります。ですので、心配しないでください。カンフル剤は特別支援教育にはないので、悩みを受け止め合いながら一緒に相談をしながら進めていかななくてははいけません。それが子どもたちを育てていくので、チームで相談しながら支えていってもらえたらなと思います。時間がきました。これで終わりにしたいと思います。

(石本) ありがとうございます。場所の移動とかをさせていただいたせいで質疑の時間がなくなってしまったのですが、せつかくの機会ですでもし何か聞きたいなという方がいましたら質問してください。

今なかったらまたその紙とかに書いていただくという方法でもいいかなと思います。特別支援教育はどの学校種にいても絶対関わりますし、LD等専門員の方も、鳥取県ではそうですし、鳥取県以外でも別の形でお世話になると思います。拍手をしておしまいたいと思います。

テーマ2 「教育相談」

(片山) 今日のテーマは教育相談ということで、お二人の先生をお招きしております。みなさんの方から向かって右側の先生からご紹介いたします。鳥取市立美保小学校からお出でいただきました松川先生です。

そしてもう一方は、鳥取市立青谷中学校からおいでいただきました河本先生です。

そしてこの会のコーディネートをしてくださるのが石本先生ですので、このあとはお進めいただきます。

(石本) 教員養成センターの石本です。今日はテーマ、パネル、教育相談ですね。教育相談の授業で参加している方もいると思いますけど、それ以外の方は教育相談という言葉も、あまり聞き慣れないという人も中にはいるかもしれないと思います。教育相談という言葉は、使う文脈によっていろんな使われ方するので、教育相談というのはこういうものですよとはっきりと言い切れないところはあるんですけど、今日ざっくりと学習指導ですね、小学校中学校で、勉強を教えること以外の対応、子どもたちに対する対応だと思ってもらったらいいです。話の中にも出てくると思いますけど、実際に教員になったとしたら、学習指導、勉強を教えるという部分以外での子どもとの関わり、生徒指導、教育相談というのが非常に大きな割合を占めますし、非常に重要な役割を持つところがありますので、その辺についてじっくり話を聞いてもらえたらと思います。生徒指導、教育相談について授業でももちろんお話していますが、実際に学校現場でどんな風に子どもと関わっておられるかというのはなかなか聞く機会がないと思いますので、しっかり聞いてもらいたいと思います。では、早速始めていただけたらと思います。お願いします。

(1) パネリスト講演：

松川智子 鳥取市立美保小学校

(松川) 皆さんこんにちは、よろしくお願ひします。こういうのは初めてなのでちょっと緊張していますが、よろしくお願ひします。でも、この部屋は実は5~6年前に教員免許状の講習で来たことが、あるのでなんとなく安心しました。でも、こっちの立場になるとは思っていなかったのでもよろしくお願ひします。教育相談の取り組みということで、お話をということだったので、私も教育相談担当になって2年目です。ですので、わからないこともいっぱいあるので、日々、取り組んでいる様子とか自分が研修とかで学んだこととかで、あと、少しでも学校現場の様子がお伝えできたらなと思いますので、よろしくお願ひします。

初めに、美保小学校について紹介させてください。美保小学校は児童604名、最新情報です。あと、職員は43名です。新1年生は約15の園から入学して来るので、かなりいろんな地域から集まってくるような感じです。鳥取の中では大規模校です。子どもの実態としましては、やはり人数が多いですので、パワーがあります。やるぞといった時には一生懸命やりますし、実力もあります。あと、比較的素直な子が多いかなと思います。それから、パワーがあるということで元気です。その反面、個人差はあるんですけど、やはり持続力が弱いと言いますか、根気強さという面では弱い面があるなと思います。問題を解くときにちょっとわからんなあと思ったらすぐ諦めてしまうとか。そういう子がやはり多いなあとと思うので、継続して指導しているところなんです。先ほども少し言いましたけど、私は、美保

小学校でCO教員とって、教育相談コーディネーターなわけですけど、不適応対策に関する取り組みを進めることが主な仕事内容です。不適応、といってもいろいろあると思うんですけど、例えば、行き渋りの不登校です。その背景には、児童の特性があることが少なくないので特別支援教育との関わりも大きくなってきます。次に、校内研究について少し紹介させてください。「笑顔とやる気にあふれた子どもの育成」「道徳と特別活動で子どもを育てる」というテーマで取り組んでいます。視点としましては、道徳と特別活動を研究教科(領域)としまして、研究に取り組んでいます。その中でも、道徳と特別活動のつながりを意識するというので、つながりを書いた構想表というものを作るとか、子供同士をつなげる教師の言葉かけ、発問の仕方ですとか、そういうものを研究しています。特別活動では、スマイルタイムとって、月に一回なんですけど、昼休憩を長くして掃除をカットして、ペア学年、1年と6年、2年と4年、3年と5年という形で、ペア学年と一緒に遊んで楽しんで、クラスで遊ぶこともあります。ペア学年で遊んだ後は、ありがとうカードとって、一緒に遊んだ感想ですとか、いっしょに遊んでくれてありがとうということをメッセージで交換し合って、お互いにやりがいといいますか、自己肯定感を高めることにつながっていると思います。それから、目当てを持って取り組む学校行事ということで、行事の前にはめあてをたてて掲示しています。めあてを立てればなしではなくて、終わった後、振り返りを書いて、自分ができるようになったこととか、逆にもうちょっと頑張れたなあと書くことを書いたりして、次の生活につなげるようにしています。この研究によって、道徳性や自主的な力が高まると、自己肯定感や自信を高めることにつながると思っています。よって、前向きな姿勢を持てる子どもたちは、先ほど申した不適応の予防的な取り組みにつながると考えています。

次に、日ごろの取り組みとして、子どもに対しての取り組みを紹介します。これは、先ほどからもそうなんですけど、今日お話しすることは私1人がやっていることではなくて、美保小学校職員全員がチーム体制で取り組んでいることです。子どもたちへの取り組みとしては、朝の様子をしっかり観察するというです。交通立ち番とか玄関の様子を見ることで気づくことが結構あります。やはり、普通通り登校班でちゃんと来る子も多いんですけど、中には遅れてくる子や、車で送ってもら子もいます。それから、学校までは来るんですけど、児童玄関で止まってしまう子もいて、例えば、その子に私が話を聞いてみたんですけど、なぜかという、玄関に入ったところで、運営委員会の子たちが挨拶を毎日しているのです。その挨拶運動が苦手な子がいて、それで入れないという子がいました。すぐ「入りんさい。」って言っちゃうんですけど、やっぱりその子の気持ちを聞いてみるとなるほどと思うところもあるので、やっぱり聞いてみないといけないなと実感したところなんです。傘立てとか靴箱やスリッパなんですけど、揃っているかどうかというの意識して見えています。これらのことは不

思議と子どもたちが落ち着いているかどうかということにつながっていて、やはり傘立ての傘がバラバラだったり、靴箱に入っていなかったりすることが多いと落ち着いていないことが多いです。逆もそうです。同じことで、学校全体を環境整備するってことも気を付けていて、特に特別教室なのですが、そういうしっかりと整えておくことで、ものが動いているとかあったはずのものがなくなるとか数が減っているとか、そういう変化に気付きやすくなります。それから、美保小学校では今年は会議室と言っているのですけど、相談室のことです。教室に行きにくい子があります。その部屋は私と生活適応支援員という立場の先生がいて一緒に担当しているのですけども、学習時間はプリントなどを中心に活動しています。学校の時限に合わせて過ごしているのです。でもですね、本当は、ここは一時的な場所、ちょっと入りにくいからちょっと心を落ち着ける場所という位置づけなのですが、結局ずっとそこで過ごしてしまうという子もいますので、そのあたりの対応が難しいなあと実感しているところです。あまり無理に教室に行こうっていうとそれがストレスになって逆に行けなくなったりとか、我慢して行ってもあとでえらくなったりとか、そういうこともありますので、そのあたりの対応を悩んでいるところです。そういう悩みも尽きないので、教員同士の取り組みとして、情報交換、情報共有というのは日々やっていて、気になることももちろんですが、あの子こういうところが良かったよとか、ということも話しております。毎週金曜日の放課後に終礼というものがあったり、毎月職員会議もあったりしますので、定期的に情報交換しています。子供たちの実態を知るということで、毎月生活アンケートをしていますし、鳥取市からスクリーニングシートという子どもたちの様子をチェックするシートが配られています。それから、最初に申したのですけど特別支援教育とのかかわりも深いので、個別の支援計画とか個別の指導計画を作成するのですけど、そちらも指導に生かしています。また、特に気になる子が出てきた時には、その都度、支援会議をしています。そのときに、アセスメントシートというものがあまして、これは県のほうから出ているものなのですが、今年度から本格的に始まったものなのですが、そういうシートで家族構成とか欠席日数とかをまとめておくことでスムーズに会議を進めることができている。いろいろ支援、指導をしているのですけど、やはり一番は、井戸端支援会議ということで、最初の情報交換と同じなのですが、何気ない会話から、そういうばこんなことがあったとか、こういう時どうしたらいいかなとか、職員同士の会話が一番だなあって思います、なかなか支援会議を設定する時間も取れなくて、学校現場はとても忙しいのですけど、こういう何気ない会話から、相談につながるということが大事だなと思いますので、相談しやすい雰囲気をつくるということも気を付けていきたいなと思っています。それから、外部の関係機関との連携ということで、まずスクールカウンセラーさんが各中学校区に配置されています。毎月一回二人のスクールカウンセラーさんが来ら

れていて、継続的に関わってもらっています。とても、子どもたちにとっても安心できる存在で、保護者さんも相談されることがあるのですけど、それが終わった後に少しお話をしますが、私も相談しちゃうっていうような、すごく安心感のある方です。とても助かっております。それから、LD等専門員という立場の方もおられて、学習中心ですけど、定期的に、様子を見に来ていただいてアドバイスをいただいています。それから、中学校との兼務教員という、小中連携をスムーズにするために、中学校から様子を見に来られます。それから、SSW といって、スクールソーシャルワーカーさんという方もおられて、月に一回お話をし、いろんな広い視野での助言をいただいています。いろんな方々に、連携していただいております。それから、通級指導教室というのがありまして、ひびきの教室、ことばの教室、さんさん教室ということで、それぞれの課題や特性に合わせて、いろいろあります。コミュニケーションの取り方が苦手だったら、ひびきの教室とか、自分の特性を知ってよりよく過ごしやすくなるために、どうすればいいか、自分のためにも、周りのためにも、これからの生活が過ごしやすくなるためにはどうすればいいのかということを考えたり教えていただいたりしています。ことばの教室やさんさん教室は言語とか発音不明瞭な子たちが通うことで改善することがあります。さんさん教室は聾学校の先生に来ていただいて、通級指導をいただいています。それから、適応指導教室という、「すなはま」というところに行っている子もいて、こちらは不登校傾向の児童が行くのですが、市の教育センターにあります。こちらに通うことで、少しずつ学校に気持ちが向かうということもあります。それから、県の教育センターがやっている教育相談会、こちらもお医者さんに相談することで今後のアドバイスをいただいたりします。もう一つは最近よく話に出てくるのが、鳥取法務少年支援センターというところが、こちらは臨床心理士さんがいて、心理相談やカウンセリングがいただけるということがあります。もう、いっぱい関係機関があります。児童相談所ももちろんそうですし、本当にたくさん関係機関との連携をもって子どもたちは成長していると実感しています。最後に、私が、教育相談を担当して考えているや自分自身が学んだことをお伝えして、まとめたいと思います。

一番考えるのが、予防的観点ということで、これはある研修で学んだことなのですが、やはり不登校や行き渋りが起きてからだとなかなか深刻化しているので、なかなか難しいところがあります。ですから、未然防止、その前の段階で未然防止を考えていきたいと思います。実際、行き渋りや不登校が起こったときに一番大事だと思うのは、その子の気持ちを認めて、深刻化を防ぐということです。いくら大人の考えで頑張れ頑張れと言っても、その子が納得しないと動けないことが多いので、やはり、不登校に限らないですが、子どもたちの気持ちを聞くというのが一番だなあとつくづく感じます。今、二つ目に言っていました、共感的に話を聞くということで、こちらの思

いとしてはいっぱいあるのですが、やはり子どもたちの思いをまず聞いて、共感する。その上でどうしていくかを一緒に考えていくのが大事だなあって思います。それが話せる信頼関係を作っていかなければならないと思います。信頼関係には、やはり日々の会話とか連絡の取り方とか、そこを密にするということだと思います。あと、特別支援教育の考え方をどの子にもということで、先ほども少し言いましたが、やはりその子の個に合った支援の方法があります。この子には有効だったが、その子には逆効果であるとか、いろいろありますので、その子がどうすれば過ごしやすいかを考えるのはすべての子に対して必要だと思います。それから、周りの支えで大きく変わるなあとと思います。連携のところでも言いましたが、カウンセラーさんに聞いてもらうことで気持ちが落ち着くことも多いですし、本当に周りの支えは大きいなあとと思います。それから、支え合いということ、支え合いの「あい」は愛情の「あい」だなあとと思います。あと、最後に、相談できる力と書いているのですが、これは大人もそうだなあとと思います。一人で抱えないということです。自分もあまり人に相談できる方ではなかったですが、この担当になって、人に話したら気持ちが楽になることもありますし、子どもはもちろんなのですが、大人も一人で抱えずに共有するってことで解決することもありますので、ここは、大事だなって思います。とにかく、焦らずに、すぐに変わるものではないというスタンスでないと、落ち込んだりするので長い目で考えていく必要があると思います。不登校になっている子も、その子にとっては必要な時間なのだなあって思いますし、その子を焦らせないように支援をしていくことが大事だなって実感します。最後に、これは私も普段頑張らないといけないことなのですが、視野を広く持つことや多様性の社会だなと最近思うので、自分が知らないことってたくさんあると思いますので、皆さんこれからいろんなことがあると思うのですが、興味があることはもちろんですが、興味のないことも聞いてみたりして、こういうものもあるのだとか、ちょっとでも知っていたら思い出せると思うので、日々、私自身も学び続けたいといけないと思うのですが、いろんな本とかテレビとかもそうですが、人との関わりも含め、本当にいろんな社会の様子を知っていくことが大事だと思います。では、最後に、皆さん、1+1=2ですね。よく子どもたちを写真に撮るときに言うことなのですが、2という笑顔、最終的には笑顔かなと思います。いくら話聞くといいっても、怖い顔で言ったら話してくれないですし、ニコとした笑顔が一番大事だと思うので、皆さんの笑顔で子どもたちに対応してもらったら大丈夫だと思いますので、これからも頑張ってください。ご清聴ありがとうございました。

(石本) ありがとうございます。今、相談できる力という話もしていただきましたが、教員になってからいきなり身に付くものではないので、授業中にも話していますが、学生のうちからそれができるようにしてもらえたらな

と思いますし、人に相談という前に雑談もできないといけないと思いますので、コミュニケーションをどうとっていくのかも学生のうちから身に付けてもらえたらなと思います。中には、いろんな用語が出てきましたが、学年によっては、イマイチその用語が分からないということもあったかもしれないですが、それについては分からなかったところを調べてもらったり人に聞いてもらったりしてもらえたらなと思います。鳥取は、独自のCO教員とか、LD等専門員とか、鳥取の独自の言葉で独自の制度がありますので、あまり一般的には調べても出てこないかもしれないですが、今聞いてもらった感じですかね。あとは、スクリーニングシートはどこの学校でもある程度あると思いますが、鳥取でも県で統一して、どういう内容かイメージできないかもしれませんが、まず欠席数があって学習の様子があって、忘れ物とか遅刻の様子があって、対人関係もあるし、家庭の様子もあるし、あと保健の虫歯云々とかもあるし、校費等の滞納がよくあるかとかいうことも含めて、環境全体を見ていくというアセスメントシートを使っているところですね。あと、個別の指導計画、支援計画がどう違うのかと思った人はもちろん調べてください。全国的な制度です。支援センターについてもよく出てくるので調べておいてください。では、引き続き、河本先生のお話を聞きたいと思います。

(2) パネリスト講演：

河本俊顕 鳥取市立青谷中学校

(河本) はい、こんにちは。青谷中学校の河本です。ここに立っている自分が不思議な感じがします。私は、先生は好きでしたが、自分が教員になるとは思っていませんでした。私は教員採用試験を受けて、講師を何年もして、30歳までの採用にギリギリ間に合って採用されました。大学4年の頃、大学院に合格し、入学準備を始めた瞬間に父が亡くなって、大学院を辞めて帰って講師をはじめました。

以前、友人の関係で、和歌山大学でゼミの講師をしてほしいということで行ったのですが、なかなか学生さん時間通りに来ないのですよね。皆さんはすごいですね、時間通りに来られてすごく熱心だなという風に感じしております。今日は、30分の内容ですので、私が感じてきたことをお伝えできればと思っています。

これは私が紹介された新聞記事です。もっと身長が高く生まれたり、もっとイケメンだったりしたらよかったなとか、声が洪くてかっこよかったらもっと生徒の反応は違うだろうなどは思うけど、でも現状はこれですから、なかなか勝負しどころがないわけです。隣の学級の先生はとてもかっこよくて、ビシビシ指導するわけですよね。そういう取柄がない私はどうしようかといつも困っていました。なかなか生徒は聞いてくれない。女子とかは、そっぽを向いているのですよね。そのときは苦労しましたね。褒めてもダメ、叱ってもダメ、毎日もう泣きそうでした。だけど、最近気づいたのは、何かいい言葉があったらいいかなと思

って、魔法が使えたらカッコいいなと思って、魔法は使えませんが、なんとかその魔法っぽい言葉を使えば、子どもは動くのです、というのを今勉強中です。これが私の自己紹介です。

今の気持ちや、やる気、思考パターンは、実は学生のころと変わっていません。多分、皆さんも将来ここに立ったことを思い描きながら話を聞いてくれればと思います。今48歳ですので、20数年前、学生だったらたぶん、後ろの方で座って聞いていたかなと思います。昔と今の気持ちは一緒です。魂の量も変わっていないのでほぼほぼ一緒です。でも、多くの失敗を重ねましたので、少しは成長したかなと思います。失敗だけは負けません。私が大切にしていることや意識していることは、「生徒がいて、自分がいる」ということです。生徒が来るから、授業ができるので、日々真剣に授業をしています。あと、先輩の実践を参考にしています。自分が先生になりたての頃は、隣の先生の話とか、全部真似をしてやっています。それは、失敗をなくすためです。それはすべて生徒のためです。自分のためではなく、そこにいる学級の子どもたちのために、先輩の真似をしてやっています。本当は、真似をしたくないのですよね。プライドもあるから。だけど、隣の上手い先生の真似をしています。子どもたちは、真似ばかりして、と言うのだけど、それは、すべて生徒のためにやってきました。

ここで聞きます。あなたはどんな先生が好きでしたか。一緒に遊んでくれたり、面白かったり、授業が上手い、優しい、カッコいい、真面目、とかありますが、たぶん皆さん思うのが、自分の話を真剣に聞いてくれた先生だと思います。それと、自分のことを認めてくれる先生かなと思います。どうですかね。イケメンでは決してないですよ。学校にはいろんな先生がいます。いろんな先生がいるけど、こんな私も、生徒指導主事を何年もやってきました。何故私ができるのかというと、いろんな先生がいて、だからこそいいのです。生徒たちと関わるチャンスが増えるからいいのです。怖い先生もいれば、ユニークな先生もいるけど、先生の数がいれば、その分チャンスが増える。だからこそいい。なので、皆さんも先生になる価値があるという感じですよ。必ず、ヒットする生徒がいますから、是非先生になってほしいなと思います。あなたが目指す先生の理想があると思います。きっとね。プラス、絶対大事なものは、生徒の声を受け止められる、最後まで聞くことができる先生になってほしいということです。これがカウンセリングマインドということになります。一方、求められない先生は、生徒の声を聞かない、実態が見えない、見ようとしない、なんでも生徒のせいにする、自分を変えない。どの教室に行っても自分を変えずに同じ事ばかり伝える先生。大きな声で怒鳴る、配慮に欠く言動がある。本当によくありません。これが不信感になったり、クレームになったり、トラブルの原因になります。こんなことで、学校不適応が発生し、不登校の原因になることもあります。

先生になって、大きなものは授業です。学級経営もあります。生徒指導、生活指導もあります。進路指導もあれば、

部活指導もあります。でも、すべてに共通しているものは、もうお分かりですね。カウンセリングマインドです。教育相談の気持ち。どんな優秀な部活指導でも、高圧的な指導ではなく、今は話を聞きながらする、カウンセリングマインドが流行っていますが、今の学生さんたちと同じように、話を聞きながらする、これが全部に共通したカウンセリングマインドですので、ここがまず教育相談の第一かなと思います。生徒の声を親身になって聞き、受け止め、しっかりと最後まで聞くということが大事かなと思います。これが教育相談です。とても大事なことです。生徒が元気に学校に行きます。これ、当たり前と思っておられますよね。皆さんもちゃんと来ましたが、すごいですね。でも、朝起きられない生徒もいますよ、実際にね。服装を整えて、これもなかなかね、学生服が着られません。学習準備をして、着席をして、先生を待ち、静かに授業を受ける、宿題をすぐ出す。というのが当たり前のように、実はこれ当たり前ではなくて、これは隠れたカリキュラムとって、学校文化が作ってきたものです。だから、普通に教師になって、これができると思ったら大間違いで、なかなか朝も起きずに、学校へも来ないという生徒もいます。それをどうするかという話です。ちょっと昨日の授業の様子を紹介します。

<普段の始業前の動画が流れる>

(入ってきた瞬間に、)普通に入って来ますよね、これって普通に見えて普通ではないのですよね。ちゃんと教科書持って入って来るとするのは、ありがたいことで、美術の教員をしています。生徒が来なかったら意味ないので。生徒が来ないこともありますし、探しに行かないといけなこともあります。全員が来ないと、大変なことになります。普通に来ることはありがたいけど、当たり前ではないということを知ってほしいと思います。

私が心がけていることは材料を準備しておくことです。5分前に生徒は来ます。ここに仕掛けがあって、ちゃんと生徒たちがやるのが分かれば、持続的に動くようになっているので、叱らずに、魔法が使えるのです。教室は開いているし、物が全部あるから、生徒たちはずっと自動的に学習に入ることができます。これ二分前でいい。聞こえました？さっき、「遅れてすみません。」って言っていましたよね。二分前なのに。すぐくないですかこれ。叱っていません。一言も言っていないのにこういう授業が始まるというのは、仕掛けがたくさんあるということを知っておいてもらって。「座れ！」とか「やれ！」とか言っていないのですよね。こういう風にしていくのがいいかなと思います。

中学生も、みんな悩み、不安を抱えています。悪ふざけをします。それは悩んでいるからです。皆さんもそうですよね。教育相談は全員にとってとても大切です。本当は頑張りたい、でも不安を自分から言えません。自分でもどうしようもない。心配をかけたくない、というサインをぜひキャッチしてほしいと思います。キャッチするためには、生徒の傍にいつもいる先生であってほしいと思います。本

当はいつも生徒の傍にいてほしいと思います。あとは、生徒が声をかけやすい先生でいてください。あとは、相談を親身になって聞くことができる先生であってほしいと思います。教育相談で求めるのは姿勢と、本気で向き合って解決しようと一生懸命になることです。なかなか解決はできませんので、家庭の問題とか、兄弟姉妹と比べられるとか、いろんなことが原因だけど、解決しようと一生懸命になってほしいと思います。まずは解決したいという気持ちを伝えることが大切かなと思います。私が意識しているのは、ディズニーのキャストの精神です。本を読んだのですが、ソフトコンタクトを落としたお客様のために、いつまでも探し続ける姿勢が大事かなと思いますので、よく、生徒が「無いっ」ていうときには地べたを這って探します。キャストキャスト…。ずっと今でも頑張っています。例えば嘔吐しますよね、キャストキャスト…って思います。是非お願いします。笑顔です。

学校教育の課題が二つありまして、学力の向上と、不登校対策が今の大きな学校の課題です。学力の二極化と、長期欠席生徒の増加です。学力向上については、教員の指導力向上のための職員研修をしています。組織対応で、自分だけではなく、チームでやるということです。不登校も未然防止のための職員研修があり、これも一人ではできないので、組織でやっています。掃除の時間に短い箒を野球バットのように持っていた生徒がいました。私が目をしかめて見ます。何も言わずに。生徒は何と言ったと思いますか。普通なら「すみません。」と言いますよね。違うのですね。「じろじろ見ないでください。」と。びっくりしましたね。最近は変わっていますよね。最近の風潮ですね、先生が叱ると、横を見て同調を見てチエって言いましたね、昔は。最近は違いますね。笑いながら、「なんでそんなに怒るの、うける〜。」と言います。怒ってもしようがないです。なんで怒っているのってね。そういうなかなか怒っても聞かない風潮になってきたので、先生方とても苦勞する時代かなと思います。

不登校とは、年間200日の中で30日以上欠席のことを言いますし、7日以上だと報告対象になります。全国的にも数が増えています。不登校ゼロのために、学校嫌いにしないために、学校づくりをしていますので、CO教員、これは、コーディネーターのコーを使ってCO教員の配置をしています。不登校になる理由ですが、不安傾向や怠学傾向などがあります。基本的には一緒ですね。不安というのは勉強に自信がない、友達の視線が気になる、これはどちらも同じくらい強いですね。怠学もそうですね。勉強に自信がなかったり、友達の視線が気になったり、誘いがあったりして、これ全部優劣付けずに1位ですね。不安も怠学もほぼ同じ理由です。学校に来ない理由は、不安か怠学のどちらかだと思います。学習、友達、学校文化、進学、部活がありますが、すべて、そこから出ようとする子たちに未然に手を差し伸べる感じが教育相談ですので、未然防止をしていこうというのが考え方の基本です。不登校になってから相談するのでは遅いので、それまでに必ず手を打

うというのが今の考え方の原則です。それまでに、全員に同じように手を打つのが未然防止の考え方で。

最後ですね、ポイント言います。1人1人に、心を許すこと、チームで対応する、家庭との連携、あとは外部機関との連携です。つまり、未然防止です。必ず状況改善します。中学校で登校できるとかではなくて、将来的には改善するので、未来志向で対応を是非してほしいと思います。教育相談は先生方として1番大事な姿勢ですので、必ず全員が持っていないといけないマインドです。必ずそこを大事にしてほしいと思います。最後です。なんでも相談できる先生になってほしいと思います。かけがえのない存在であってほしいと思います。生徒のため、もしくはその家族のために頑張ってください。おじいちゃんおばあちゃんのためにも頑張ろう。あと、私はいじめがあるとすぐ僕はおじいちゃんおばあちゃんの顔が浮かびます。家族みんなが応援していると考えて本気で対応お願いします。あとは、生徒は直接口では言いませんが、先生大好き！と思われるような先生になってほしいと思います。あなたがたは素晴らしい先生になれると思います。では、ちょっとおまけで、教育相談的な授業の様子をお伝えしていいですかね。

<ニュースで紹介された講師を招いての授業の動画が流れる>

これは、自分がしたいなという授業で、講師をオファーして作った授業ですので、先生方も是非自分がしたいなという授業を作ってほしいなと思います。

興味ありますか、美術。ワクワクする授業を是非したいということで、どこにもない授業を自分で作った実践を紹介します。でもこれは前半も言ったけど、真似ですよ。全国大会に行ったときに、ああこれいいなと思ってそれを鳥取県に持ち帰ってやった授業です。

<授業時間の動画が流れる>

屏風を、美術の先生方で作ったという話です。ぜひ参考にしてください。以上です。

(3) 質疑応答

(石本) 河本先生ありがとうございました。今、松川先生からも河本先生からもありましたけども、教育相談の授業では、理論的な説明というか生徒のために学習指導と教育相談、生徒指導を対比して、学習指導以外の部分を教育相談というふう位置付けていますが、今のお話を聞いて分かると思いますが、実際としては、学校でやっていることはある意味すべて教育相談というか、教育相談につながっている、下地となっているという部分があるのですよね。授業もそうだし、実際には学習のアイデアもそうだし、それ以外のいろんな生活場面も話も全部つながっていますね。もうひとつ、共通して出てきたところとして、未然防

止とか、予防の話があったと思うのですが、やっぱりこちらが叱らなくてもよかったというのが一番本当はいい教育相談ですよ。それを教育相談という風に子どもたちはイメージできないと言われるかもしれませんが、本当はそれが一番いい教育相談だと思いますので、その辺のイメージも先生の話聞いて、ちょっとイメージできたところがあるかなと思います。

では、まだ時間がたっぷりありますので、皆さんからの質問を受けたいと思いますが、ここでいきなりオープンに聞いて喋ってもらえるかなという気はするのですが。皆さん、質問考えてくださいね。なかなか、大学の授業では、公立の先生にこういう風に質問をする機会はないと思いますので、もし質問があれば、まずはオープンに聞きますけども、質問がある方、手を挙げていただけるでしょうか。遠慮せずに挙げてください。といっても挙げないですよ、やっぱり。挙げないのに、その感想用紙に質問書いたらちょっと、と思いますよ。書いている人がいたら書いていることを是非言ってくださいね。誰もいなかったら片山先生に強制的に当ててもらいますから。まだ考える時間がもう少し必要というのであれば、少し時間的余裕を持ってもらうために、僕のほうから一つ質問をしたいと思うのですが、教育相談というのは、今お話しされていたように学校全体の指導全てのことだと思うのですが、教育相談に関連して、一番大変だなと思うことをお聞きできたらと思うのですが、よろしいでしょうか。

(松川) そうですね。一番は決められないのですが、いろいろ悩むことはありますが、家庭との連携ということで、やっぱり保護者さんの考えがかなり子どもに影響するので、いろいろな考え方があっていいと思うのですが、そこが上手く話し合えない場合が一番辛いなことですかね。ほとんどの方、というか皆さんが子どものことを思っておられるのですが、学校との会話、対話というか、そのあたりが上手くいかないということもありますので、そのあたりをどう歩み寄るかというところが難しいかなと思います。

(河本) 教育相談というのは計画的にできるので、大変さはないです、実は。生徒指導は突発的に起きるので、生徒指導と教育相談はリンクしているのですが、生徒指導は突発的だからこそしんどさがありますが、教育相談は計画的にできるので、しんどさはないので、大変さというのは実はないかなと思います。

(石本) ありがとうございます。家庭との連携というところではやっぱり教育相談的な対応が特にすぐ必要な家庭ほどなかなか難しくなってくるところがあります。一番そこは難しいところがあるかなと思いますけど。今仰っていただいたように、子どものことをご家庭の保護者の方は思っておられるのですが、その思い方が特殊だとかということもあるので、思っているというところをどう汲み取っ

て対応していくのかというところが出てくる気がしますね。

(片山) 多分、今日の学生さんたちは、皆さん自身の経験としても、ひょっとしたらないかもしれないし、皆さん自身今お二人がお話をされたような立場にはなったことがないので、皆さんはこのお二人のお話を聞いて、自分がそういう立場になるとき、どういう風にその物事を掘っていったらいいのかなというところが一番難しいのではないかなと思います。お二人の話聞いて、どちらにも共通することとして、私が思ったのは、やはり、今こうだからって、今だけで勝負しないということ、長い目で見るというお話もありましたし、やはり、やがては改善するという可能性を信じているというのが、大きな根本にある考え方ではないのかなと思いました。そういうのも、お二人の先生方が、今までのご経験の中で培われたものも勿論たくさんあると思いますし、その中で、本当にその言葉だけではなくて、その経験として得られてきたものだという風に思うのですが、皆さんにとって、これからというもの未知でしょう。いろんな、先生になりたいという気持ちが皆さんにあると思うのですが、どういう立場になっても、こういう風にコーディネーターさんという立場でなくても、やはり、普段の子どもとの関わりの中で、教育相談というカウンセリングマインドというのは重要だと思うのですが、今の皆さんのご自身を振り返ったときに、カウンセリングマインドを持つために、まずどんな要素が自分の中に必要だというふうに皆さんは考えていらっしゃるのかということ、自分に突き付けてみてほしいなと思います。十分やれるという自信を持っているという人もあるかもしれないし、今の自分だと少し不安だなと思う人もあるかもしれないですけど、そのカウンセリングマインドの根本的にベースとして持ち合わせてもらいたいというものをお二人から聞かせていただきたいなと思いますが、まずその前に皆さん自分自身のことを考えてみてほしいなと思います。いいでしょうか、聞かせていただいても。何が必要だと思いますか、カウンセリングマインドに。

(学生1) カウンセリングマインドに必要なこと、私は先生方がおっしゃったと思うのですが、何よりも生徒の立場になること。先生たちの立場だと、教育する側の目線になってしまいがちなので、生徒の心理のためには、その立場から一度離れて考えることも大事なので、あまり先生というふうには思わず生徒と接してみるというのもアリかと思えます。

(学生2) カウンセリングマインドに必要なことは、話をよく聞くことかなと思いました。自分の思いをただ生徒にぶつけるというか、相談だからということで自分の考えをぶつけるのではなくて、まずはその子の話をきちんと聞く。そして、何で悩んでいるのかという内容をきちんと聞くことが大前提なのではと思います。

(片山) それでは、カウンセリングマインドのベースについて、お二方から、大切なものを伝えていただけますか。

(河本) 僕も結婚し、子どもは3人いますが、家に帰ると駄目なお父さんで、会話もない本当にどうしようもない父親で、家では教師をしないようにしています。僕は家で先生を演じるのは嫌いだなと思っていて、本当にあほなお父さんを演じています。学校では、切り替えて仕事に行きます。カウンセリングマインドというのは持って生まれてそのまま残っているのではなくて作り上げるものかと思うので、仕事に行ったらそうなる。家に帰るといつもの自分、というのが良いかなと意識しています。あとは、皆様が嫌いだ先生のようにはなつてほしくない、威張ったり、かっつけたり、そんな先生じゃなくて、生徒のために笑顔の先生になってほしいと思いますので、高圧的だったり、俺だったら腹立つなあとという言い方をしないでほしいと思いますし、そういう風な温かい先生になってほしいと思います。全員がそうあるべきではないし、立場によって先生も違うので、若いときの先生、主任の先生とは違うので、造り変えています。授業の顔、部活の顔、学年主任の顔は違いますので、生徒は先生と思って期待するので、作っていかないといけないと思いますので、若い先生たちは是非生徒のためにいい教師の顔で振る舞ってほしいと思います。

(松川) 話の中でも言ったのですが、私自身が大学のときとかもって勉強しておけばよかったと。座学も勿論ですが、いろんなことに興味を持っていればよかったなと思います。先ほども話の中で言いましたが、自分の中のイメージがあまりないというか、世界を知らないことで、「こうあるものだ」みたいなイメージがあつて、それで失敗したことも何回もあつて、なので世界にはいろんな人がいるんな考え方があるのでこんな考え方でもできるのだとか、今こういう人が有名なのだとか、本当に日々いろんなことが入ってくるのですが、視野を広くしていくということが、自分の教養にもつながるといふか、あ、そういうええ聞いたことあるなというのものにも対応できるし、自分自身の考え方を広げるといふことが大事だと最近思うので、いろんなことを知ってほしいなと思います。自分自身、そこに気を付けていきたいなと思っています。

(片山) 皆さんが、これから教員を目指す中でも、いろんな面を持ち合わせてないといけな。子どもたちの様子やタイプに応じて、自分がどれだけの幅の広さの、深さのある教員を演じることができるのか、そういう立場に立って話せるのかについていふことで、教員になるという教えるというイメージが多いと思うのですが、実際は教わる部分がたくさんあるんですよね。しかも、自分が教えているつもり児童や生徒から教わることはたくさんあります。そこで成長していくわけなのですよね。だから、そういう固

定的なとか一元的なとか、既成概念ではなくて、本当に皆さんが見たもの出会ったもの、子どもたち、それからもっと美しいものとか、そういうものに対して皆さんがどれだけ感じ取り、子どもたちに伝えることができるか、それって、皆さん一人一人で随分違いがあると思うのですよね。だからそういうものを皆さんは子どもたちに十分伝えていけるように、やり方は十人十色だと思いますし、様々あると思いますが、それだけの力を今の学生の中で、蓄えていってほしいなと思いますし、そのために、今お二方のお話を聞いて多くの刺激を得ることができたのではないかと思います。

(石本) 誰か質問があるよという方はいますか。

(学生3) まずは、先生方も相談できるということをおっしゃったのですが、まず雑談がないと相談できない、普段から相談できる関係作りが大事だということも分かりますけども、なかなかその相談までいくのは、大人でも難しいことかなと思います。自分を変えられないということもあるのですが、普段から相談するというのは、どういう関係でやっているのか、教えていただきたいです。

まず、カウンセリングを行う上で、自分たちが相談を受ける前に、そういう普段から相談できるという気持ちが大事だと思うのです。そういったところで、先生間同士の関係がどのように作られているのかなというところをお願いします。

(河本) 素晴らしい質問でした。私は現在指導的な立場にいますので、先生方の話を聞いたり聞き出したりをしています。そういう時間を朝と夕方に持っています。やはり自分からは是非相談をされたいと思いますし、自分でやってしまつて失敗することは誰でもあるので、言わないでするより、言ってからしたほうが良いなと日々思っていますので、相談の大切さはひしひしと感じます。

(松川) 同じような感じですね。話の中でも言ったのですが、井戸端会議的な感じで、カチツとしてしまうとなかなか固くなってしまうので、やはり、普段の会話ですね。最初から相談ではなくて、「寒かったな」とエアコンつけるとか、そういう話から、本当に自然な流れといふか、友達同士で話すような関係で。私も、相談したりしますし、お互いに聞き合うといふか、一方的ではなくてお互いに相談し合うという感じですね。二人で話しているとほかの先生が入ってきて、また広がったりとかして、そういう関係が今美保小ではできているので職員間関係は大事だなという風に思います。

(学生4) 相談をする関係を作るためには、まずは雑談できる関係といふのを話されていたように、私もそれはすごく大事だと思うのですが、そもそも子どもたちが先生というものにあまりいいイメージがなくて、最初の出会いから

構えられているような、最初からフラットな関係で、関係構築していけるものでもないと思っていて、少しでも、自分が先生になったときに、不自信を覚えられているなど思った時に、どういう風に相談できる関係まで持っていくのか教えていただきたいです。

(松川) やはり、 $1+1=2$ ですかね、笑顔で。一回少し険悪になったときでも、少し間をあけて、すぐには難しいのですが、髪を切ってきたときに、「さっぱりしたな」とか一言でいいと思うのですが、ちょっとずつ声をかけ続けていくというのが一番かなと思います。すみません、あまり答えられないのですが、子どもという対子どもではなく、対人間という感じで、友達同士と同じだと思います。喧嘩した後みたいな感じで、少しずつ、いきなりは難しいので少しずつ距離を縮めるという感じですかね。

(河本) 学級経営的に、言うことを聞く子は2割で聞かない子は2割とよく言われます。基本子どもたちは先生のことが好きだし、分かってほしいと思います。表現が苦手な子もいます。また、変なことをわざと言ったり、変なことをしたりする子がいますけど、本音は、先生のことが好き。だからこそ、私たちは表現することじゃなくて、その心の裏側を見て声をかけていく必要があるんで、受けもつクラス全員が好きという気持ちで対応してほしいなと思います。分かりやすく言えば、若いころ聞いたのは、「同じ時間ずつ喋れ」ということです。全員に声をかけるような仕組みが大事なと思うけど、生活ノートでもいいし、必ず同じような文章を全員に書く。日記を書いていない子にも書く。できることはいっぱいあるので、差をつけずに言う。でも、今の子どもたちは、「つるむ」ってわかりますかね、グループを作っているんで、話すことは難しいです。女子とか、ずっとひっついていて中での行動なので、一人呼んでというのは無理なので、一瞬ですね、一人になった瞬間に、自然なところでタイミングを見てすつと行くという忍者のように、ですね。意識していかないと、生徒たちは朝来て帰るまでがすごく早いので、ノートに書いたり、声かけたりという風に、意識的にしています。でも、書いたコメントも、生徒たちは気になるのでお互いに比べます。「あの子はこう書いてある」というような。やっぱり、差のないようにはするけど、言いたいことは書きたいので、考えたことをタイミング良くパンパン書く。生徒には表現が苦手な子もいます。だけど、本当のところは、それは先生が好きだよというメッセージなので、そこを上手にほぐしてあげるのがいいと思います。

(学生5) 話下手なので、躓くところがあるかと思いますが、でも、教育相談で、未然に防ぐという考え方がありましたが、これに関して質問させていただきます。昨日、痛ましい事件が、小学校が下校途中、中学生による殺傷事件が起きたというようなことがありましたけども、それについて、本を自分は読んだのですが、「よい子が人を殺す」とい

う本を読んだのです。その本曰く、よい子はすぐ従順でニコニコしているという情報が載っていたのです。それで、実は、笑顔を作っている。学校でニコニコしているというのが実は作り笑顔なのかもしれないというような考え方があります。殺傷事件とまでいなくても、いろいろな葛藤が生徒とか児童にはありますが、表に出さないということもありますよね。結局、それが起因して最悪の事態というか、何かしら葛藤の原因があると思いますが、何かしらそういう笑顔、ニコニコしているといっても、この子何かおかしいなという、そういう考え方、捉え方なのですが、そういう子どもたちをどのように見分けるのかと疑問に思いましたので、お答えいただけないでしょうか。

(河本) ありがとうございます。先生を希望されているということでよかったね。学校は、保・小・中・高と引継ぎをします。やはり私たちは小学校、保育園の情報をいただくことがあるので、その中で、生徒、児童を把握するようにしています。表情だけでは見ないところもあるので、そのへんの手掛かりかなという気がします。でも、多くの子がストレスを抱え生活をしているので、本当に見えにくくなっているなという気がします。本当に教室に上がるのはすごく毎日大変だし緊張するし、でもその中で暮らしているという中で小さな変化があれば、自分だけではなくて先生方全員で対応していくという姿勢を常に持つておくのが大事です。それが起きないように遊びや教科指導や道徳とか学活とか、それをやっていくというのがいいかなと思います。起こってしまわないように頑張るということであって、万一起こってしまった場合には外部の方にもお任せすることもあると思います。起こってしまったから駄目な先生では絶対にならないと思うので、ならないように頑張っていく姿勢が大事なという風には思います。

(松川) 学校で、頑張っている子はすごく多くて、お家の方と話す、家ではやりたい放題ですというような子は結構多いです。でも、それが、使い分けているというか、誰でもそうですよね。それが普通だと思うので、それはある程度はどの子にもあると思いますが、先ほど言われたような、抱え込んでしまっている、我慢して笑顔を作っているような子というのはやはり、何か気になる。やはり普段から見えていないと分からないですが、少し気になるなと思ったら、今年、私は担任ではないのですが、その担任の先生に「どうですか」と聞いたりとか、ほかの授業に出ておられる先生に聞いたりして、やはり気になったときに職員間で共通理解するということが最初にやることかなと思います。

(石本) 他に質問がある方はいますか。では、少し今の話に補足しますが、そういうよい子や反抗期がない子が問題を起こすというようなことは、結構20年前ぐらいから主にそういう話が多かったのですが、今は反抗期、ここで聞いてもそうだと思いますが、「反抗期ありましたか」と聞いて

でも反抗期がない学生が大半だと思います。だからよい子がどうこうという言い方は今少ないのですが、子どもの捉え方という面では、ちょっと形式的な言い方ですがアセスメントですが、アセスメントのときは表情だけではなくて、アセスメントシートもあれば、スクリーニングシートもあれば、学校アンケートもありますし、そういうのもありますよね。勿論そこに本当のことを書かない子もいるので把握はしにくい子もいますが、教員が把握できなくても、子どもが悩んでいるということがあるとき、子どもたちだけで解決できるようなクラス作りをするというのが未然防

止ということかなと思います。全員の悩みや困っていることを教員が把握するというのは、できれば理想的ですがなかなか難しいと思うので、クラスの中の友達同士で、なんとかそれを解消できるようなクラスを作っておくというのも教育相談の一つの形、未然防止の一つの形かなと思います。

では、時間ですので質問がなければよろしいでしょうか。では、ほぼ時間ですので、これで終わりにしたいと思います。最後に先生方に拍手をしておしまいにしたいと思います。ありがとうございました。

石本雄真 (鳥取大学教員養成センター)

片山敬子 (鳥取大学教員養成センター)